

紀 要

第 23 号

2010.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

安土山・織山周辺の埴輪

辻川 哲朗

1. はじめに（図1）

滋賀県内出土埴輪については以前に集成を行い、埴輪編年試案を提示した（辻川2003B）。その後、集成の遺漏が判明した例について随時資料化を進めているほか、前稿において修正を要する点については訂正を行うとともに、資料化がなされている例についても再検討作業を続けている。その成果に基づいてあらためて総合的な再検討を行うつもりであるけれども、中間報告として個別の事例について報告を行ってきた（辻川2003A・2005・2006A・2006B・2009）。

本稿は、そうした中間報告の一環として、安土山・織山周辺の埴輪資料を報告し、前稿の補訂を行うことを主たる目的とする。さらに、その結果を踏まえて、当該地域における埴輪の展開過程について素描を試みてみたい。

2. 埴輪資料の概要

（1）安土町特別史跡安土城跡伝羽柴秀吉邸出土埴輪

本資料は既に報告がなされている（木戸1993）。しかし、今回実見した結果、新たな知見を得られたので、再実測を行うことにした⁽¹⁾。

出土遺構（図2） 特別史跡安土城跡伝羽柴秀吉邸跡（以下、伝羽柴秀吉邸跡と省略する）は、安土山南麓部、安土城大手道のなかほど付近、その西側に隣接して位置する郭である。埴輪はK5区の石垣背面崩落土中から出土したもので、切岸以前に存在していた古墳を郭造成に伴って破壊したものと考えられる。

出土埴輪（図2） 出土した埴輪は円筒埴輪である。形象埴輪は確認できない。底部を含めて4段分を復元しうる個体（円筒埴輪1：図2-2）のほか、口縁部片（円筒埴輪2：図2-1）がある。

円筒埴輪1 図2-2は器厚が1.3～2cm程度と厚く、重厚な印象を受ける。外面はタテハケ調整（4cm/本）を施した後にヨコハケ調整（4cm/本）を加えている。ヨコハケ調整には一部停止痕跡らしき箇所が確認できるものの、判然としない。内面は2段目までをナデ調整によって仕上げる。2段目には一部にナデ調整に切られた左傾ナナメハケ調整が残る。3段目は左傾するナナメハケ調整が加えられる。突帯は断面形状が台形を呈する。突帯間隔は底部高が約11.5～12cm、2段目が約10.8～11cm、3段目が約11.3cmを測り、各段がほぼ均等に割りつけられている。底径は19.4cm程度に復元できる。スカシは2段目に円形スカシ2孔を対向方向に配置する。3段目以上については、遺存部ではスカシを確認できなかった。焼成については、遺存部分に黒斑を確認することができないことから、窖窯による

無黒斑土師質焼成品といえる。

円筒埴輪2 図2-1の口縁部片は、口縁部がやや外反気味に広がり、端部は面を作りだして納めている。口縁部高約13cmを測り、口径は30cm程度に復元できる。内外面調整については、器面の遺存状態が良好でないため、詳細をしりがたい。

全体の復元 両者は接合関係にない。しかし、胎土や色調（浅黄橙色〔7.5Y R8/3～8/4〕）の点で類似しており、同一個体の可能性が強い。報告者は4突帯5段構成に復元できるとするものの、3突帯4段構成の可能性も残っていると考える。前者の場合は全長約57cm、後者の場合は全長約46cm程度に復元できる。

その他の古墳時代遺物（図2） 伝羽柴秀吉邸跡上端部のK5石垣背面崩落土からは、円筒埴輪以外にも古墳時代の須恵器・耳環が出土している。須恵器には、杯蓋（5）・壺口縁部（3）・高杯脚部片（4）がある。小片のため詳細な時期決定は難しいけれども、杯蓋はTK10型式頃に比定できる。おおむね6世紀前葉～中葉頃とみなして大過ないであろう。また、耳環（6）は腐食が著しく、材質の詳細を知りがたい。

小 結 本事例は窖窯焼成による無黒斑土師質焼成品であり、外面調整に二次ヨコハケ調整を施していることから、窖窯導入以後～中期後半頃に位置づけられる。須恵器は6世紀前葉～中葉頃のものであることから、これらの遺物は時期の異なる複数の古墳に由来すると考えられる。そうすると、伝羽柴秀吉邸跡付近には、中期から後期にかけての古墳が存在していたとみることができる。

（2）東近江市・安土町八ヶ谷1号墳採集埴輪⁽²⁾

概要 近年、織山丘陵上において存在が確認された古墳である。織山丘陵の稜線上に位置する（図1）。墳丘は遺存状態が悪く、詳細は判然としないが、約30m程度の前方後円墳になる可能性がある⁽³⁾。墳丘からは円筒埴輪片が少量採集されている。

採集埴輪 採集された埴輪は小片であるけれども、最も遺存状態が良好な突帯部片は、やや大ぶりで扁平な突帯を持つもので、黒斑が確認される。器面の遺存状態が不良であるため、内外面調整の詳細を知りえない。よって、残念ながら詳細な時期を判別することはむずかしい。しかし、明瞭に黒斑が遺存することから窖窯導入以前の所産であるとみて大過ないと考える。

（3）安土町常楽寺山1号墳出土埴輪

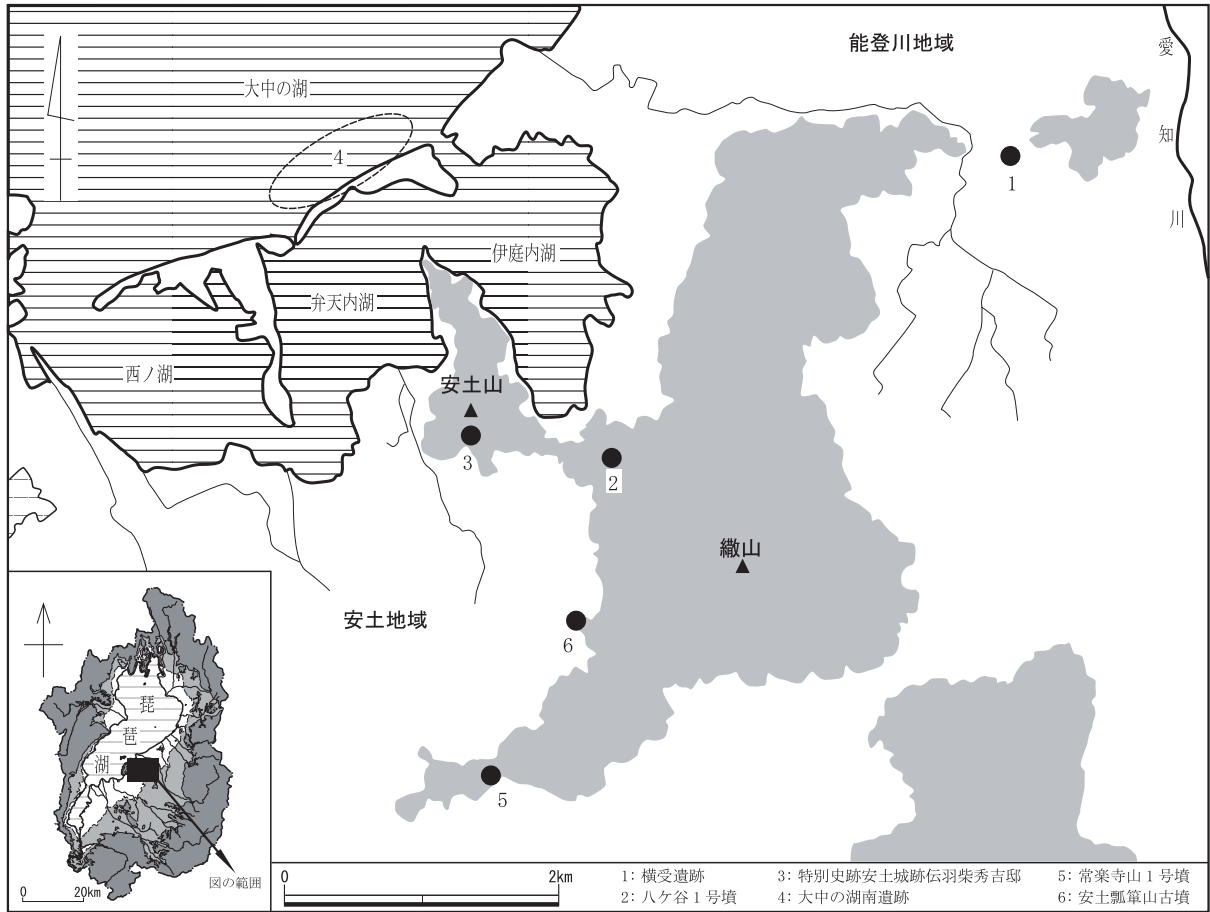


図1 本稿であつかう遺跡・古墳

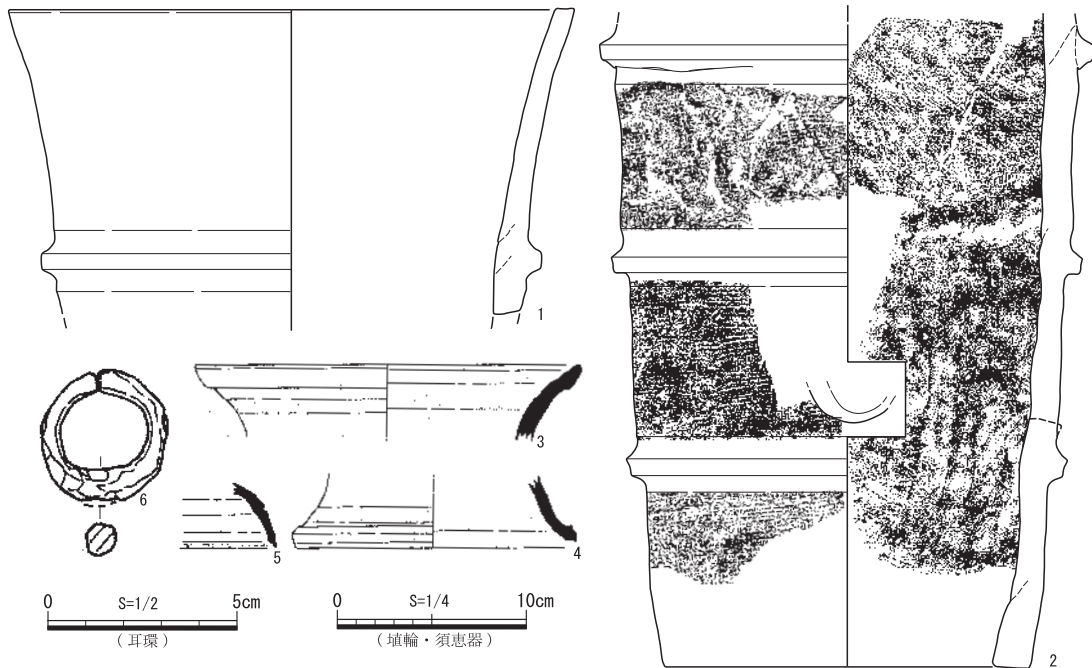


図2 特別史跡安土城跡伝羽柴秀吉邸跡出土埴輪関連図

概要 常楽寺山古墳群は、叡山から西方に派生する丘陵上に位置する古墳群である。古墳群は6基からなる。1号墳については以下の記述にゆずる。2～4号墳は後期の横穴式石室墳である。5号墳は直径30m程度の円墳で葺石を持つ。過去に円筒埴輪片が採集されたという6号墳は後世の削平を受け詳細を知りたい。今回問題とする1号墳は、1973年に町史編纂事業に伴う発掘調査が実施された。その調査結果については、すでに報告書が刊行されている（秋田他1977）。1号墳出土の埴輪について実見を試みたが、円筒埴輪の一部を除いて所在を確認することはできなかった。一方、須恵器については所在が判明し、実見することができた。その結果、既報告とは異なる点が見出されたので、再実測して報告する。

墳丘 常楽寺山1号墳は、現在の安土町役場付近に存在した古墳である。採土によって墳丘のほぼ半分が崩落しており、墳形・規模を確定はむずかしいものの、全長30m程度の前方後円墳になる可能性が高い。

埋葬施設 大きく破壊された竪穴式石室の一部が確認されている。石室は南東隅の一部分を残すだけであった。しかし、わずかに残された痕跡から、長軸約2.9m・短軸約1.4m・残存高0.4m以上に復元された。この石室の特徴は、長軸と短軸の比率が約2：1と幅広であること、壁面の石材間に粘土の充填がみとめられたことである。

出土遺物 採土等の影響により原位置をとどめる出土遺物はなく、鉄製甲冑の部品と思われる小札・鋸状鉄製品、刀剣断片等の鉄器類と滑石製勾玉1点が出土したにとどまる。埴輪については、墳丘北端部で円筒埴輪底部2点が据えられた状態で出土した以外は、崩壊した墳丘の崖面や遊離土中等からの出土であり、原位置をとどめない

埴輪（図3） 円筒埴輪（図3-1～9）と形象埴輪（図3-10～27）が出土した。先述したとおり、円筒埴輪の大半と形象埴輪のすべては現在所在が不明である。よって、以下の記述は、主として報告書の記載内容と読図結果に基づくものである。

円筒埴輪 1・2・5～9は円筒埴輪の底部片である。比較的残存状況が良好な1・2に注目してみたい。1は底部を含む2段分が遺存する個体である。底径は約13cmである。内外面は器面の遺存状態が不良であるため、調整の詳細を知りえない。底端部付近の器厚が厚く、とくに端部は内面にむけて突出している。2も底部片である。残存する底部高は約13cm、底径は18.5cm程度である。外面には一部にタテハケ調整を残す。内面はナデ調整によるようである。3・4は突帯部付近の体部片である。いずれも比較的突出度の高い断面台形の突帯である。内外面調整は不明である。5～9は底部片である。小片のため、底径復元にはいたらぬ。5・6には外面にタテハケ調整を残す。また、報告書の写真図版からは、6の外面に明瞭に残る黒斑を確認できる。

形象埴輪 家形・甲冑形・草摺形・蓋形があり、それ以外に器種を同定しがたい不明品がある。

〔家形埴輪〕11は家形埴輪の棟部分の破片である。12は家形埴輪の屋根部分の破片である。ヨコ方向の突帯を境に上下に網代文様が線刻によって施されている。14も同様に家形埴輪屋根部片である。外面に網代文様を施す。19は屋根端部付近片と思われる。20は裾廻突帯のコーナー部分かと思われる破片である。外面にはヨコ方向の線刻にタテ方向の線刻を加えている。27は家形埴輪軸部片である。窓（スカシ）が2ヶ所に残る。

〔蓋形埴輪〕15は内外面に弧状の線刻を施す破片であり、蓋形埴輪立ち飾り片であると考えられる。16・21も同様に立ち飾り片の可能性はある。

〔甲冑形埴輪〕10は冑側面片かと思われる。外面にヨコ方向の区画線とタテ方向の区画線を線刻で加える。17は外面に線刻を施す破片である。以下の18・23等から考えて短甲の一部とみなしておきたい。18は短甲の覆輪部分の破片である。「×」様の線刻を繰り返すことで革綴を表現している。24も短甲部の破片である。線刻と方形粘土帯によって、三角板の革綴を表現している。

〔草摺形埴輪〕23・26は草摺形埴輪片である。外面にヨコ・タテ方向の線刻を施し、23はさらに波形線刻を加える。

〔不明〕22は片面に直線の線刻を加える破片である。25は鱗状の突出をもつもので、両面に線刻を加えている。

須恵器（図3） 無蓋高杯・蓋杯・器台・壺もしくは甕がある（図3-28～38）。28は無蓋高杯である。口径約10.5cm、残存器高約3.5cmである。内面には顕著な降灰を残す。口縁部外面に竹管による円形文が施される。29は報告書において短頸壺口縁部片とされた個体である。須恵質焼成品である。30～33は蓋杯の身である。底部は回転ヘラケズリによって丁寧に調整している。受け部はやや内弯気味に立ち上がる。諸特徴からみてTK216型式に併行すると考えられる⁽⁴⁾。34～37は器台脚部片である。このうち、34は報告書で「円筒底部？」として天地逆に報告されていた個体である。実見の結果、底面と考えられていた面はスカシの一辺と考えられることから、脚部片として図化し直した。外面には1条の突線がめぐる。内外面ともにヨコナデ調整による。35～37は外面に波状文を施した小片である。38は壺もしくは甕の体部片である。外面は上半をナデで、下半を平行タタキによって調整する。既報告の傾きを修正して、図化し直した。

小結 須恵器はTK216型式に併行する。一方、埴輪は窖窯焼成の時期にもかかわらず、有黒斑土師質焼成品を含んでいることが特徴である。また、形象埴輪の器種が比較的豊富であることも留意すべきであろう。

（4）東近江市・安土町大中の湖南遺跡採集埴輪（図4）

概要 弥生時代中期の集落遺跡として広く知られてい

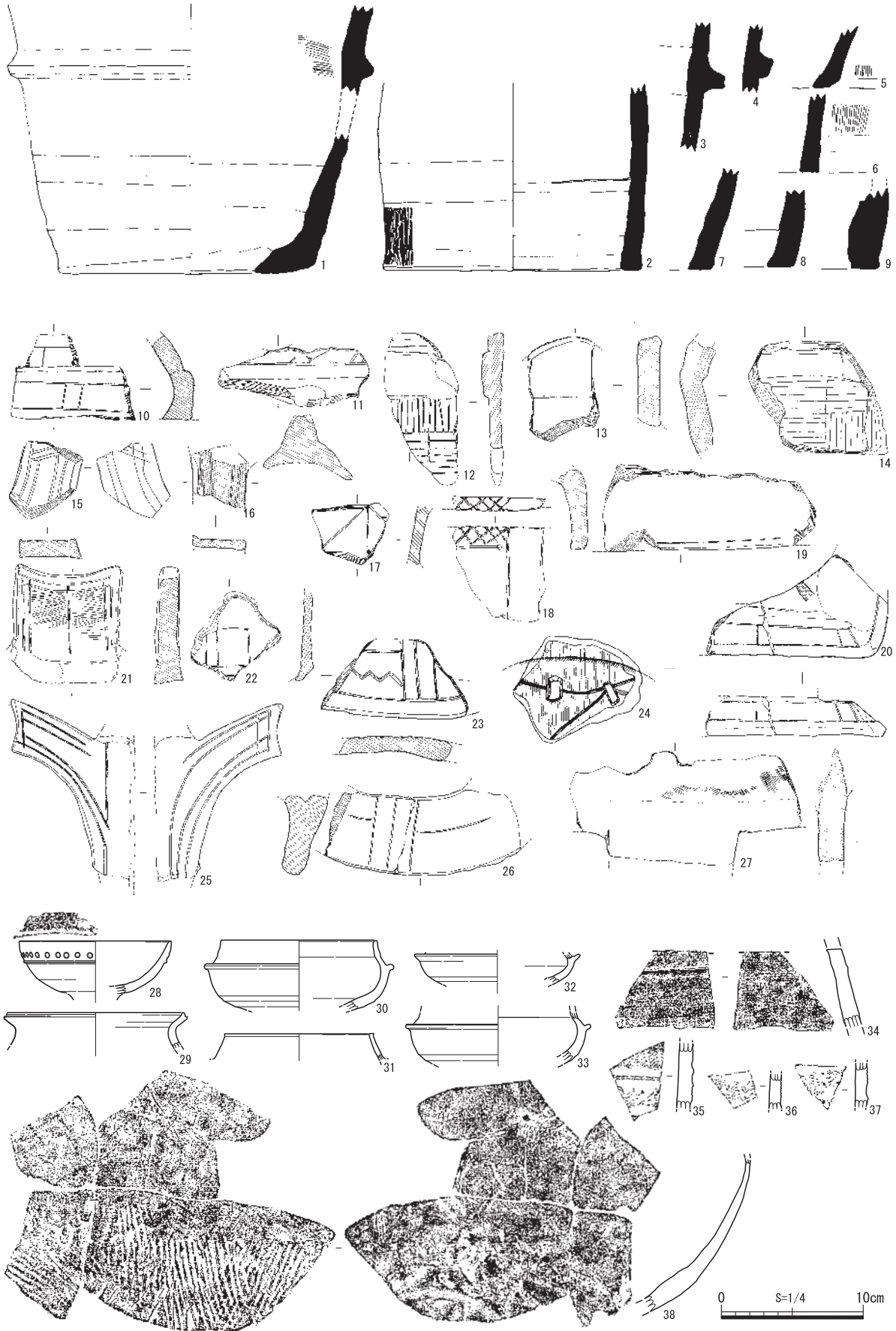


図3 常楽寺山1号墳出土埴輪・須恵器

る大中の湖南遺跡でも埴輪片が採集されている。これは干拓事業のさいに内湖底から採集されたもので、滋賀県教育委員会と東近江市教育委員会において保管されている。しかし、いずれも採集状況の詳細については、記録がないために知りえない。前者については既に報告されているけれども（辻川他2002）、後者は未報告であったので実測を行い、あわせて報告することにしたい⁽⁵⁾。

滋賀県教育委員会所蔵資料 本資料は円筒埴輪であり、数量的には乏しい。いずれも破片であるため、全容を知りたい。5は朝顔形埴輪の肩部付近の破片である。突帯は低平な断面台形を呈し、外面にヨコハケ調整を、内面に左傾するナナメハケ調整を施す。6～8は円筒埴輪の体部片である。内外面ともに器面の遺存状態が不良である。わずかに、6の外面には左傾するナナメハケ調整を確認できる。7には円形スカシの一部が遺存する。9は朝顔形埴輪の頸部付近の破片である。以上の破片は残存部分に黒斑を残しておらず、いずれも窯窯焼成によるものと思われる。破片資料のため、分量を復元することはむずかしい。

東近江市教育委員会所蔵資料 本資料は大中の湖南遺跡出土品とは確定できないものの、外面に鉄分が沈着している状況が滋賀県教育委員会所蔵資料と極似することから、その可能性が高いと判断した。10は突帯部付近の体部片である。外径は約26cm程度に復元できる。下段には円形スカシの一部が残る。本例も内外面には鉄分が沈着しているので、調整を見出しがたい。わずかに、外面の一部にヨコハケ調整を、内面にヨコハケ調整を確認することができた。11は円筒埴輪の底部片である。底部を含めて2段分が遺存する。底部高は約11cm、底径は17.5cmに復元できる。内外面ともに鉄分が沈着しており、調整については判然としない。いずれも現状では黒斑を確認できない。

小 結 これらの特徴から、所属時期を推定すると、おおむね中期後半頃に位置付けて大過ないだろう。川西宏幸氏による円筒埴輪編年（川西1988）では、Ⅳ期に併行するものであろう。

（5）横受遺跡出土埴輪⁽⁶⁾

概要 横受遺跡は、叡山北端にひろがる平野の微高地上に位置する。旧能登川町教育委員会によって数次にわたる発掘調査が実施された結果、古墳時代初頭頃・古墳時代後期・古代（7・8世紀）・中世前期（12世紀初頭～13世紀末）にかけて、断続的に集落が営まれたことが判明した（植田1994・杉浦1995）。

埴輪（図4） 埴輪は2次調査の中世溝（S D302）と古墳時代の落ち込みから出土した。調査地点内で古墳が確認されておらず、埴輪も少量の小片資料であることからみて、二次的に混入した可能性が高い。本例も既に報告済みであるけれども、実見した結果、天地を逆転して図化されている例があったので、今回再実測を行い、報告するこ

とにした。

1は口縁部片である。大きく外反するもので、朝顔形埴輪の二次口縁部もしくは普通円筒埴輪の口縁部に相当しよう。内外面をタテハケによって調整し、端部をヨコ方向のナデで仕上げている。2・3は円筒埴輪の突帯部分の体部片である。突帯は小ぶりの断面台形を呈する。器面の遺存状態が不良であるため、調整の詳細は観察しがたいものの、外面には一部にタテハケ調整を残す。内面にも左傾気味のタテハケ調整が確認できる。4は円筒埴輪の底部片である。外面にタテハケ調整がみとめられる。

小 結 以上の埴輪片は、遺存部分には明確な黒斑を確認できない。ただし、小片であることや、焼成がやや軟質であることなどを考えると、窯窯焼成品と断定するには不安を残す。また、突帯の断面形状からみて、後期まで降るとはみなしがたいので、窯窯焼成以前～前期後半を含めた中期前半以前の所産と考えておくのが穏当であろう。

3. 埴輪の変遷

以上、安土山・叡山周辺での出土埴輪事例について報告を行ってきた。これらの埴輪資料を踏まえて、当該地域における埴輪の変遷を整理しておきたい。

なお、ここまで「安土山・叡山周辺」として曖昧な表現を行ってきた。しかし、以下の記述の便をはかるために、対象地域の区分をはかっておく。叡山とその中央付近から西方へ派生する安土山を目安として、以下の二地域に細分する。一つは叡山と安土山によって区切られた現在の安土町域である（安土地域）。もう一つは叡山の北から愛知川までの間、旧能登川地域に相当する（能登川地域）。

（1）埴輪の導入に関して—安土瓢箪山古墳—

当該地域における埴輪—なかでも円筒埴輪—の導入を考えると、まず問題となるのは安土地域の安土瓢箪山古墳における円筒埴輪樹立の有無についてである。

安土瓢箪山古墳 安土瓢箪山古墳は蒲生郡安土町桑実寺に所在する前方後円墳であり、墳丘長約134mをはかる前期古墳である。叡山から西方へ派生した支尾根の先端に前方部を丘陵側へ向けて造営されている。1935年に前方部において2基の箱式石棺が発見されたことを契機として、翌年後円部の竪穴式石槨が調査され、銅鏡2面・碧玉製腕飾類・鉄製武器・方形板革綴短甲・鉄製農工具・銅鏃・筒形銅器・異形鉄製品・玉類等の多種多様な副葬品が出土した（梅原1938）。

梅原末治氏の記述 1936年の調査を担当した梅原末治氏によると、「埴輪圓筒片もまた同部（後円部：引用者註）で見出された。柏倉氏が當初調査（柏倉亮吉氏による1935年の前方部調査：引用者註）の際後円部頂の東南邊で點點圓筒片の埋没してゐるのを注意したとの事であったから、這般の調査に當って、それから圍繞の工合を確かめること

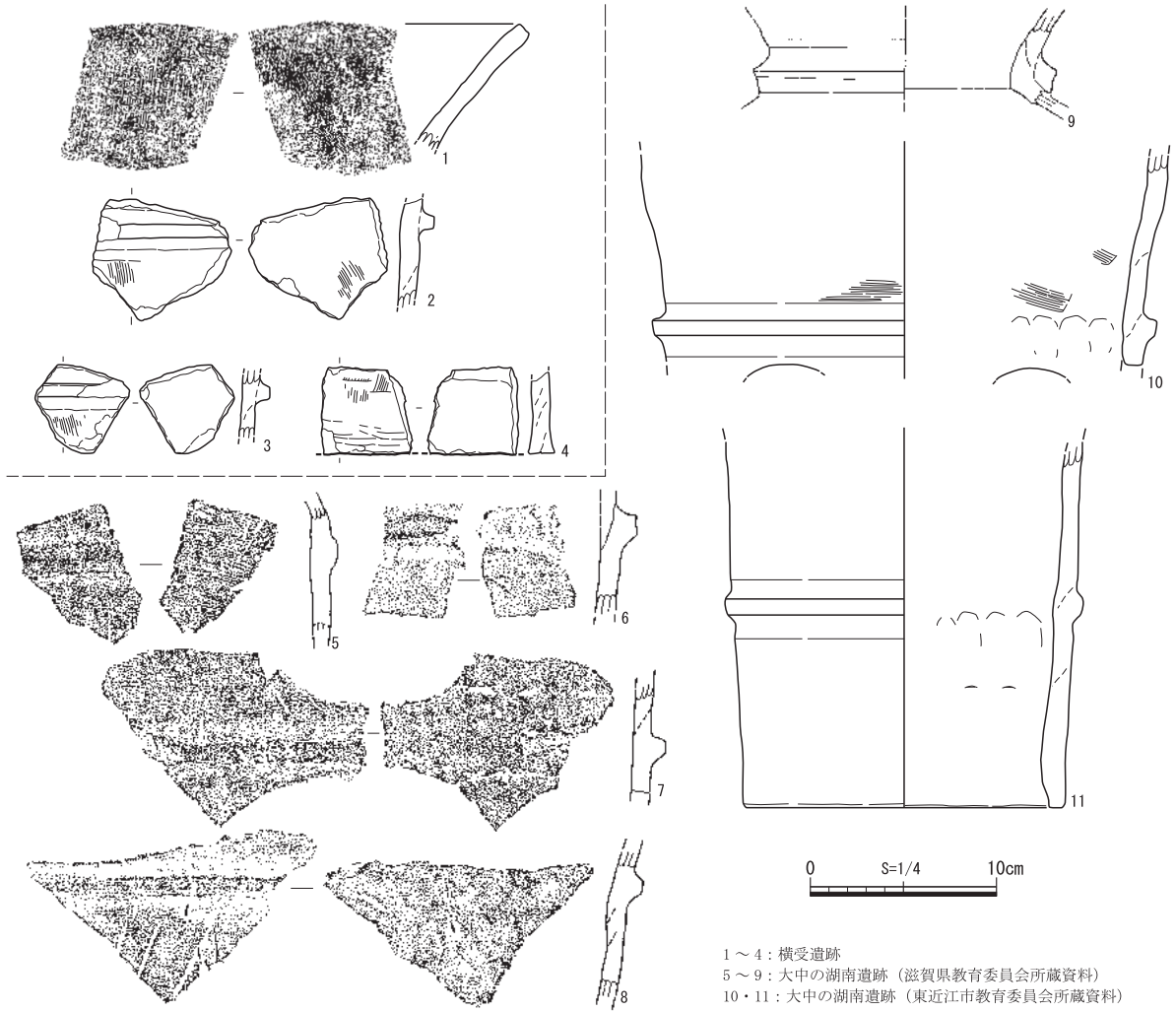


図4 安土山・観音寺山周辺の埴輪

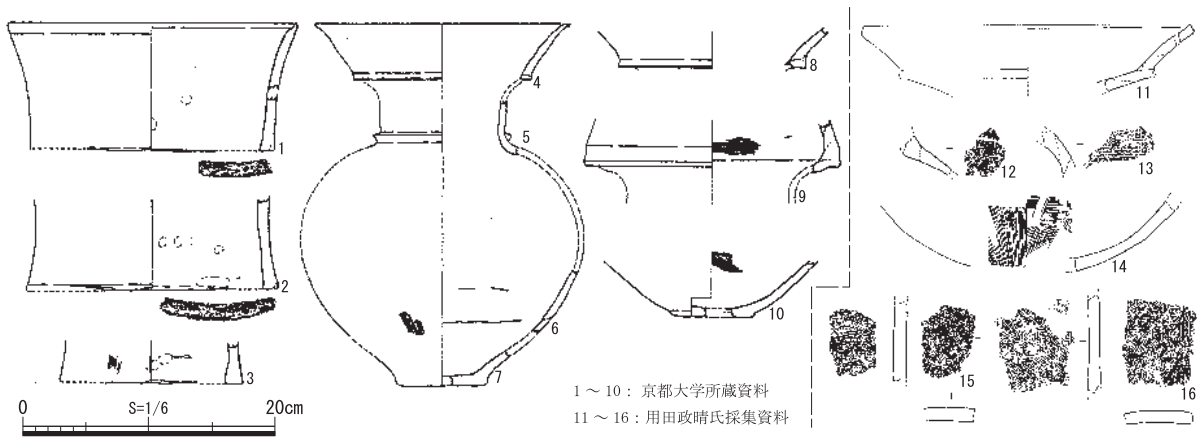


図5 安土瓢箪山古墳関連土器

に意を用いた。併し（略）發掘地域に於てはそれを立証する確たる事実を見出す事が出来ず、點々遺存した破片の大多数は大型土器に屬するものであった」（梅原1938、p 12-13）という。つまり、円筒埴輪の樹立の有無に留意して調査を行ったにもかかわらず、それを確認できなかったというのである。当時の調査者は円筒埴輪の存在を明確に否定したことがわかる。

円筒埴輪の樹立をめぐる諸論説 しかし、こうした調査者の見解にたいして、戦後になって異論が提示されるようになる。

用田政晴氏によると、1981年10月に開かれた安土瓢箪山古墳の研究会において、辻広志氏が「瓢箪山古墳出現前後の古式土師器について」と題した発表を行い、壺口縁部・穿孔した底部・埴輪の突帯断面を示して、「布留二式」に位置づけたという（用田2007）。ただし、ここで提示された資料は現在所在が不明であるし、その出土（採集）経緯も知りえない。

また、1984年の『八日市市史第一巻』のなかで、丸山竜平氏は「壺の破片と同時に埴輪片と思われる土器片も出土しており、その口縁部形状からみて、単なる埴輪とは異なり、その祖形ともいべき特殊埴輪の範疇に属すべきもの」（丸山1984、p 157）と記している。しかし、これも具体的に資料が提示されたわけではなく、「特殊埴輪」の実態については判然としないうままであった。

その後、1989年に高橋克壽氏は、京都大学が所蔵する1936年度調査の出土土器類を図化・提示した（図5-1～10、高橋1989）。それによると、出土土器類は器台形土器（1～3）・二重口縁壺形土器（4～7）・大型壺形土器（8～10）であり、円筒埴輪は確認できなかったという。これによって、梅原氏の記述が追認されたわけである。

しかし、高橋氏の指摘以降でも、「何か埴輪と考えられるような資料が採集されており、その中には突帯部分の埴輪も確認でき、円筒埴輪も少量存在するようである」（細川1994）というように円筒埴輪の樹立を想定する意見が示されることもあった。ただし、この指摘も具体的に根拠を示したうえでの記述ではないから、高橋氏の見解を覆すには不十分な感はいなめない。

それゆえ辻川は、2003年に近江地域の円筒埴輪を集成し、編年を検討したさいには、根拠を明示した高橋氏の指摘に基づき、安土瓢箪山古墳における円筒埴輪の採用を認めない立場で考察を行ったのである（辻川2003B）。

ところが近年、用田氏は自身で採集した土器片のなかに「円筒埴輪」片があることを、実測図を提示することによって指摘し、その評価を試みた（用田2007）。用田氏が提示した資料は二重口縁壺・壺底部・「円筒埴輪」片である（図5-11～16）。

採集された「円筒埴輪」片（図5） 「円筒埴輪」片とされる資料は体部片2点である（15・16）。15は南くびれ

部のやや前方部より付近の流土中からの採集品である。外面に粗いタテハケ調整、内面に左傾ナナメハケ調整を施している。横断部の曲率が緩く、体部径が30cm以上におよぶことから、用田氏は楕円形円筒埴輪となる可能性を指摘している。16は後円部墳頂部の内部主体付近で採集された破片である。内外面は粗いナナメハケによって調整される。胎土は壺形土器片に近いとされる。

円筒埴輪の存否について 用田氏によって「円筒埴輪」片とされた2点の体部片は、氏の指摘のとおり確かに楕円形円筒埴輪の可能性はある。しかしその一方で、後円部墳頂部で確認されたような大型壺形土器の体部片である可能性も否定できないと考える。いずれかを決めることは、現在の資料からは難しい。よって、突帯やスカシの存在が明確に判明する資料が得られていない現段階では、安土瓢箪山古墳における円筒埴輪樹立を積極的に認めがたいと考える。

（2）横受遺跡・八ヶ谷1号墳の埴輪—前期後半～中期前半— 続く前期後半から中期前半の埴輪資料としては、今回報告を行った能登川地域の横受遺跡例と、安土地域の八ヶ谷1号墳例が相当すると考えた。ただし、いずれの事例も資料的制約はいかんともしがたく、この段階の様相をいまだ十分に把握できていないのが実情である。ここでは、現時点での見通しを示すにとどめたい。

横受遺跡例について まず、横受遺跡例については、小片資料のため、詳細な時期決定は困難であるけれども、突帯の断面形状等から本段階に積極的に位置づけた。そうすると、今のところ能登川地域における埴輪の最古例となる可能性が出てくる。この能登川地域の場合、古墳出現期に位置付けられる神郷亀塚古墳（前方後方墳）の出現以降、それに継続する顕著な首長墓を見出しがたい。中沢・斗西遺跡群のように、弥生時代後期頃から古墳時代をとおして、さらには古代まで継続するような大規模な集落があるにもかかわらず、その近辺に顕著な首長墓が見いだせないのは疑問に思うところであった。今回の横受遺跡例の位置づけが妥当であるとする、少なくとも当該地域において前期後半～中期前半頃の間に円筒埴輪を樹立した古墳—おそらくは首長墓—の存在を想定することができることになる。

八ヶ谷1号墳例について 本例も資料的な制約から明確な時期を決定するのは困難であるものの、突帯形状と黒斑が認められることに基づいて、本段階に位置づけた。本古墳については、後に触れることにしたい。

（3）中期後半の埴輪

今回報告した伝羽柴秀吉邸跡例・安土常楽寺山1号墳例・大中の湖南遺跡採集例が該当する。当該段階への位置づけには、窖窯焼成の導入とヨコハケ調整の採用を指標とし

た。大中の湖南遺跡例は、ヨコハケの存在を確認できるとともに、窖窯焼成による事例である。伝羽柴秀吉邸跡例も窖窯焼成品であり、かつヨコハケによる調整が認められる。一方、安土常楽寺山1号墳例はヨコハケの有無が確認できず、また有黒斑土師質焼成品ではあるけれども、伴出の可能性のある須恵器類によって時期を想定した。以下、それぞれの事例から派生する問題について述べておきたい。

伝羽柴秀吉邸跡例について 安土山では、特別史跡安土城跡の発掘調査に伴って古墳時代の遺構・遺物が検出されていることから、安土城築城に伴って古墳が破壊されたことが小竹森直子氏によって指摘されている（小竹森1993）。小竹森氏によれば、古墳時代の遺構・遺物の検出は、伝羽柴秀吉邸跡をはじめ伝織田信忠邸跡・伝武井夕庵邸跡といった安土山南麓の大手道付近に集中しており、出土した須恵器は後期を中心とするという。また、安土山南麓には数基の横穴式石室墳の存在が確認されていることを考えあわせると、少なくとも横穴式石室墳からなる後期古墳群が付近一帯に存在していたとみて大過ないであろう。

今回、伝羽柴秀吉邸跡例を本段階に位置づけたことによって、安土山南麓における古墳の展開が中期後半まで溯上する可能性が出てきたことになる。残念なことに、伝羽柴秀吉邸跡例については、それが樹立されていた古墳の実態を直接に知る情報が現時点で全く得られていない。しかし、近江地域における中期の埴輪樹立古墳は中小規模の首長墓以上であることが多い傾向からみて、本例についてもそうした規模・性格の古墳を想定しておくのが穏当であろう。

常楽寺山1号墳例について 本埴輪群の特徴として以下の諸点をあげることができる。

①須恵器からみて窖窯焼成導入段階であるにもかかわらず、それが採用されていない可能性が高いこと。②形象埴輪については、少なくとも家・甲冑・草摺・蓋形埴輪が認められ、比較的豊富な器種組成を示すことに加えて、短甲形埴輪のように比較的丁寧な造作を行うこと。③円筒埴輪については、総じて作りが粗雑な印象を受けること。

これらのうち、①については、近隣の中期古墳の埴輪群—具体的には近江八幡市供養塚古墳（辻川2002）や野洲市野洲大塚山古墳等では確実に窖窯焼成が導入されていることから、近江地域への窖窯焼成技術の波及が一律ではなかったことを示す事例といえる。

また、②と③に示されたように円筒埴輪と形象埴輪によって造作レベルが異なることの解釈については、円筒埴輪と形象埴輪とで製作工人の系譜が異なっていた可能性を想定している。具体的には、形象埴輪は近畿中央部の工人もしくはその直接的影響を受けた工人の手による一方、円筒埴輪はそれ以外の工人—おそらくは在地の工人—によって製作された状況を考えておきたい。

大中の湖南遺跡例について 大中の湖南遺跡は縄文時代

以降中世にいたる複合遺跡であり、大中の湖と伊庭内湖・弁天内湖の間に形成された浜堤付近に展開する。埴輪は正確な採集位置等の情報を欠いた採集品であり、質量ともに乏しい。それゆえ、本例についても十分な検討が行いがたい。ただ、埴輪の存在からは、それを樹立した古墳が浜堤上に存在したことを想定しておくのが穏当であろう。なお、このような湖岸部において中期後半～後期初頭頃を中心に展開し、埴輪樹立墳を含む古墳群として、守山市服部古墳群（大橋・谷口1984）をあげることができる。

埴輪生産のありかた 以上から、近江地域における当該期の埴輪生産については、豊富な形象埴輪と近畿中央部とはほぼ同等レベルの製作技術によって製作された円筒埴輪からなる供養塚古墳例等のように、近畿中央部の工人集団を中心に編成された埴輪生産組織が想定できる。その一方で、常楽寺山1号墳例のように、異なる系譜の製作工人から埴輪生産組織が構成された事例も見出せる。このことから、安土地域という限定された地域内においても、特定の生産集団が一定期間継続して生産に従事したのではなく、個々の古墳の造営に伴って、さまざまな形態で生産組織が編成された状況を想定することができよう。

首長墓系譜の想定 従来、前期段階の安土瓢箪山古墳以降の首長墓については、中期に常楽寺山1号墳が想定されていたけれども、前後に続く例がなく、単独事例と考えられてきた。しかし、今回の検討により、少なくとも八ヶ谷1号墳（前期後半～中期前半）→常楽寺山1号墳（中期後半）→伝羽柴秀吉邸跡出土埴輪から想定される古墳（中期後半）という系譜を想定できる可能性が出てきた。

残念なことに、これら諸古墳のいずれもが詳細な情報を欠いた事例であるけれども、八ヶ谷1号墳と常楽寺山1号墳については墳丘規模が30m程度であるし、伝羽柴秀吉邸跡出土埴輪から想定される古墳も、立地からみて大型古墳を想定するのは難しい。おそらくは、埴輪を樹立した中小規模（20～30m級）の古墳—首長墓となる可能性が高いと考える。さらに、この系譜には、埴輪を持つとされる常楽山6号墳や径約30mの円墳とされる常楽山5号墳が加わり、上記3古墳の間が埋められる可能性もある。

以上から、中期を通じて、安土山南麓と叡山およびその南端から派生した常楽山の丘陵上に展開する安土地域の首長墓系譜を想定しておきたい。

（4）後期の埴輪の不在

今のところ、安土地域・能登川地域のいずれにおいても、確実な後期段階の埴輪は見出せない。この点もこれらの地域の特徴の一つといえる可能性もある。しかし、これはあくまで現時点での認識に基づくものであるから、今後該期の埴輪資料が出土することも十分に考えられるので、判断を保留しておきたい。

4. おわりに

以上、安土山と叡山周辺において確認された埴輪資料を資料化して提示するとともに、その概要を報告してきた。その内容については、前章までにおいて既に述べ来たったところであるので、あらためて詳しくは述べない。ただ、今回の資料調査によって、安土地域において中期を通じた首長墓系譜を復元できる見通しがえられたことは強調しておきたい。このことは前期の安土瓢箪山古墳の位置づけにも関わり、検討を要する問題であろう。また今回は、埴輪を中心に据えたため、埴輪資料を欠く後期以降の古墳動向については十分な整理を行わなかったけれども、当該地域の後期群集墳の動向は検討すべき課題であると考えている。これらの諸課題については、稿をあらためて検討することを期して、ひとまず本稿を終えることにしたい。

〔付記〕本稿は、『能登川の歴史 第1巻 原始・古代編』執筆にあたり実施した周辺の埴輪の基礎資料調査結果をまとめたものである。本稿の作成にあたっては、以下の方々よりご教示を得たほか、関係機関には資料調査の便をはかっていただいた。記して謝意を表するしだいである（敬称略・50音順）。

飯田 充・伊庭 功・上垣幸徳・植田文雄・大橋信弥・木戸雅寿・北原 治・小竹森直子・杉浦隆支・畑中英二・三宅 弘・山本一博・用田政晴・滋賀県教育委員会・滋賀県埋蔵文化財センター・東近江市市史編纂室

註

1. 伊庭功・上垣幸徳両氏のご配慮により、実見・実測をさせていただいた。
2. 山本一博氏のご配慮により、実見させていただいた。
3. 東近江市市史編纂室によって現在墳丘測量が継続中であり、正確な墳形・規模は近い将来明らかになるはずである。
4. 本稿における須恵器の型式は大阪府南部（陶邑）窯跡群の編年（田辺1981）に基づく。
5. 杉浦隆支氏のご高配により、実見・実測をさせていただいた。
6. 杉浦氏のご高配により、実見・実測をさせていただいた。

挿図典拠

- 図1 辻川作成。
 図2 1・2は辻川実測。3～6は木戸1996に拠り、一部改変。
 図3 埴輪は秋田他1977に拠り、一部改変。須恵器は辻川実測。
 図4 横受遺跡例・大中の湖南遺跡例（東近江市教育委員会所蔵）は辻川実測。それ以外は辻川他2002に拠る。
 図5 1～10は高橋1992に拠る。11～16は用田2007に拠る。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

秋田裕毅・中村博司・近藤 滋（1977）『常楽寺山古墳群調査報告書』安土町教育委員会・安土町史編纂委員会・財団法人滋賀県

文化財保護協会

- 植田文雄（1994）『能登川町埋蔵文化財調査報告書第32集 横受遺跡（1次調査）』能登川町教育委員会
 梅原末治（1983）『安土瓢箪山古墳』『滋賀県史蹟調査報告 第七冊』滋賀県
 大橋信弥・谷口 徹（1984）『服部遺跡発掘調査報告書V』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
 川西宏幸（1988）『円筒埴輪総論』『古墳時代政治史序説』塙書房
 木戸雅寿（1996）『特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅲ－大手道・伝羽柴秀吉邸跡－』滋賀県教育委員会
 小竹森直子（1993）『安土築城前史（1）－安土山の土地利用について－』『紀要』1、滋賀県安土城郭研究所
 杉浦隆支（1995）『能登川町埋蔵文化財調査報告書第37集 横受遺跡（第2次）・中村堂遺跡（第3次）・法堂寺遺跡（第7次）』能登川町教育委員会
 高橋克壽（1992）『近江の埴輪と畿内の埴輪』『滋賀県埋蔵文化財センター紀要 昭和63年度』滋賀県埋蔵文化財センター
 田辺昭三（1981）『須恵器大成』角川書店
 辻川哲朗（2002）『2－10. 滋賀県指定史跡 千僧供古墳群』『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
 辻川哲朗（2003A）『長浜市垣籠古墳の再検討』松藤和人編『考古学に学ぶ（2）』（同志社大学考古学シリーズⅦ）同志社大学考古学シリーズ刊行会
 辻川哲朗（2003B）『近江地域の円筒埴輪編年』『埴輪論叢』4、埴輪検討会
 辻川哲朗（2005）『長浜市村居田古墳の再検討』『紀要』19、財団法人滋賀県文化財保護協会
 辻川哲朗（2006A）『東近江市大塚古墳採集の須恵器系埴輪について』『淡海文化財論叢 第二輯』淡海文化財論叢刊行会
 辻川哲朗（2006B）『彦根市大塚山採集の埴輪について』『紀要』20、財団法人滋賀県文化財保護協会
 辻川哲朗（2009）『近江八幡市西車塚古墳出土埴輪・須恵器について』『埴輪研究会誌』13、埴輪研究会
 辻川哲朗・重岡 卓・芝池信幸・三宅 弘・小島孝修（2002）『国指定史跡 大中の湖南遺跡』『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
 細川修平（1994）『埴輪から見た「近江」の古墳』『滋賀考古』11、滋賀考古学研究会
 丸山竜平（1984）『古代のあけぼの』『八日市市史 第一巻 古代』八日市市
 山本一博（1993）『能登川町埋蔵文化財調査報告書第28集 長福寺遺跡』能登川町教育委員会
 用田政晴（2007）『第3章第2節 安土瓢箪山古墳の史的位置』『琵琶湖をめぐる古墳と古墳群』サンライズ出版
 （つじかわ てつろう：調査整理課 主任）